

2019. 5. 6

畑 啓之

兵庫県稲美町の「万葉の森」はいなみ野ゆかりの万葉歌に満たされていた

稲美町にある「万葉の森」を訪れた。稲美町は Wikipedia では次のように説明されている。

兵庫県南部に位置し、神戸都市圏に属する。兵庫県南部の加古川と明石川に挟まれた印南野台地に位置し、兵庫県東播磨県民局に区分されている。古代では印南野と呼ばれており、播磨国風土記では入波と呼ばれている。万葉集では稲日・稲見と呼ばれており、この本に登場している印南野は古くからの歌枕である。全体的に田園都市であるが、農業基盤の整備を強化しながら阪神地区のベッドタウンとして南部を中心に宅地開発が進められている。

「万葉の森」にはいなみ野にちなむ歌碑があり、また、多くの植物が植えられていた。真ん中に池があり、その回りを背が高い木で囲まれているので、全体としては静寂な雰囲気を出している。

万葉歌に、その歌を詠んだ歌人に、そしてその時代にもあったであろう花々に思いをはせる、午後の心静かな時間を過ごした。また、森内にある「憩いの館」ではお茶をいただいた。

稲美町は美しさと内容を兼ね備えた、実に立派なパンフレットを作っている。その一部を本ブログに拝借した。その素晴らしさが伝えられると思ったからである。

花々が咲く折々を見て、再度訪れてみたい。

いただいたパンフレットより

いなみ野「万葉の森」は、稲美町制施行 30 周年事業の一環として企画され、昭和 59 年に結成された「万葉の森をつくる会」の協賛を得て、昭和 60 年度から 3 ヶ年の継続事業として整備に着手し、昭和 63 年 3 月に完成したものである。

森内に建つ「憩いの館」は「ふるさと創生事業」の一環として、平成 2 年 9 月に竣工したものである（写真を参照）。森内には万葉の草花が多く植えられ、また、多くの「万葉歌碑・賛歌碑」が立つ。「万葉の花と歌」も美しい。

万葉の森の概要

いまの「万葉の森」は、福美町制施行30周年記念事業の一環として企画され、昭和59年に完成された。「万葉の森」をつくる会の協力を得て、昭和60年度から3ヶ年の継続事業として整備に着手し、昭和63年3月に完成したものである。

万葉の森は、約8,500平方メートルの敷地の中に、簡易式の造園手法により、かつての印旛野と印旛の海を中心とし彩づくってあり、その中に淡路島、加古川の流れる姿を取り入れ、回遊式日本庭園の趣に育立てたものである。

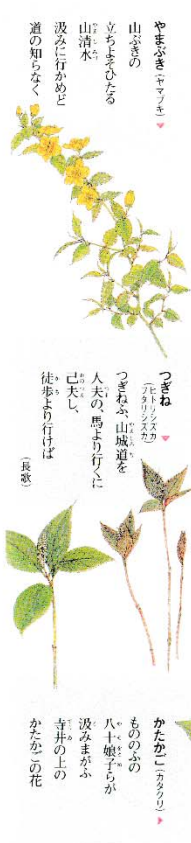
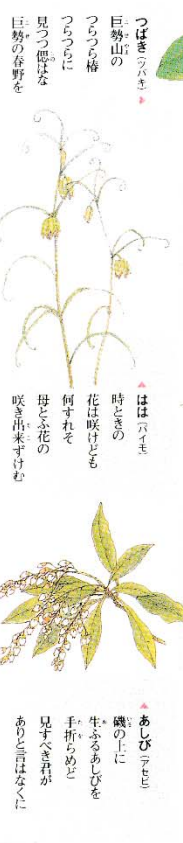
園内には地形に応じてあらゆる万葉植物が植えてあり、各種植物には標識をつけて植物名と万葉歌を記し、また多くは数十本ないし数百本の樹木を植えて森としての体積を整えんとしている。四季よりの花や木の移ろひの姿を見、またそれらを観察することによって植物学的研究に資し、あるいは万葉歌を読み味わい、文学的興味深淵の一端をなするならと思ふ次第である。

なお、園内には印旛野万葉歌碑5基を建立し、併せて現代歌人の「万葉の森」讃歌の短歌碑2基を建てている。いずれもこの森に溢れて共に、園内散策者の心をいやし、純化し、またくつろぎの空間として、思索を深めてくれるであろう。



福美町郷土資料館
 〒650-0101 福美町郷土資料館
 TEL. 0794-92-3770

いまの万葉の森



ねづき ミヅナキ
 芝付の
 美し良崎なる
 ねづき草
 相見ずあらは
 あれ恋ひめやも

つばき ツバキ
 巨勢山の
 つらつら橋
 つらつらに
 見うつ標はな
 巨勢の春野を

やなぎ ヤナギ
 青柳の
 糸のほしさ
 春風に
 乱れぬい間に
 見せむ兒もかも

みぢら ミヅナ
 時どきの
 花は咲けども
 何すれそ
 母とふ花の
 吹き出未すけむ

くれなゐ クレンアイ
 紅に
 深く染みじし
 心かも
 奈良の都に
 年の経ぬべき

みぢら ミヅナ
 藤浪の
 花は盛り
 なりにけり
 奈良の都を
 思はずや君

つぎね ツギネ
 元都の
 つぎねふ山城道を
 入夫の馬より行か
 已天し
 徒歩より行けば (長歌)

やまぎ ヤマギ
 山ぎの
 立ちよみひたる
 山清水
 汲みに行かぬと
 道の知らなく

あしび アシビ
 磯の上に
 生ふるあしびを
 手折らぬと
 見すき君が
 ありははなくに

かたか カタカ
 ものさの
 八十娘らが
 汲みまがふ
 寺井の上の
 かたかの花



をみなへし(オミナエシ)
をみなへし
咲きたる野辺を
行き巡り
君を思ひ出
たもとほり来ぬ



おもひぐさ(オモヒグサ)
道の辺の
尾花がしたの
思ひ草
今さらさらに
何をか思はむ



ねぶ(ネブ)
昼は咲き
夜は恋ひ寝る
合歡木の花
君のみ見めや
戯奴さへに見よ



ゆり(ササユリ)
油火の
光に見ゆる
わが綴
さ百合の花の
笑まはしきかも



わすれぐさ(ワスレグサ)
わすれ草
わが紐に付く
香具山の
古りにし里を
忘れむがため



なでしこ(ナデシコ)
なでしこが
花見るとに
娘子らが
笑まひのほひ
思ほゆるかも



つきくさ(ツキクサ)
月草に
衣は摺らむ
朝露に
濡れての後は
うつろひぬとも



まゆみ(マユミ)
南淵の
細川山に
立つ檜弓束
巻くまで
人に知らえじ



はぎ(ヤマハギ)
後れるて
われはや恋ひむ
印南野の
秋萩見つつ
いなむ子故に



やまたちはな(ヤマトチバナ)
あしひきの
山橘の
色に出でよ
語らひ継ぎて
逢ふまであらむ

歌碑とその歌



万葉歌碑

② 名くはしき 稲見の海の 沖つ浪
千重に隠りぬ 大和島根は
柿本人麿(巻三十三〇三)
奈良東大寺長老 清水公照書

③ 家爾之豆 吾者將恋名 印南野乃
浅茅之上爾 照之月夜乎
作者不詳(巻七一七七九)
漢書道会会長 坂田聖峯書

⑤ 後れるて 吾はや恋ひむ 稲見野の
秋萩見つつ いなむ子ゆえに
阿倍大夫(巻九一七七二)
日展作家 渡辺紫水書

⑥ 明日よりはいなむの川の出でていなば
留れる吾は恋ひつつやあらむ
作者不詳(巻十二一九八)
一東書道会会長 小山素洞書

⑧ 伊奈美野の 赤ら柏は時はあれど
君をあがもふ 時はさねなし
安宿王(巻二〇四三〇一)
日展評議員 池内神舟書

⑨ 家にして われは恋ひむな 印南野の
浅茅が上に 照りし月夜を
作者不詳(巻七一七七九)
稲美ライオンズクラブ

万葉の森 賛歌碑

① みづのへに 森うつれるはうすみどり
稲美のまほら 志づけくぞ燃ゆ
歌詠 地中海代表 香川進作並書

④ 万葉の森 なりたらば 雨もよし
うつぎうの花 恋ひてまた来む
歌詠 ポトナム 運者 頼田島一二郎作並書

⑦ 幾春を 生ひ継ぎ生ひて 訪ひくれば
心うるほふ 万葉の森
いなみ野万葉の森の会会長 中嶋信太郎作並書

さらに、いただいた「万葉集といなみ野」という資料には、「いなみ野」万葉歌の一部が紹介されている。

稲美町立郷土資料館 参考資料

万葉集といなみ野

万葉集・・・770年頃成立の和歌集。編者は大伴家持か。仁徳天皇（5世紀初めに在位）から759年までの和歌4500首余りを収録。全20巻。万葉仮名で記され、詩形・作者とも多様。

いなみ野・・・概ね東西を明石川西岸～加古川流域、南北を播磨灘～美囊川南岸で囲まれる地域。加古川以東の地域はほぼ平坦な台地状を呈し、地理学では「印南野（いなみの）台地」とされる。万葉集で「いなみ」は「稲見」、「印南」、「稲日」、「将行」、「不欲見」、「伊奈美」などと表記され、「いなみ」を詠んだものが13首収録されている。「いなみ野」は、都から遠く離れた畿外の入口に位置する「野（原野）」であり、旅情・慕情を誘う地域の歌枕として詠まれている。『播磨国風土記』、『続日本紀』では「印南」に統一表記されている。

いなみ野万葉歌（参考文献：『万葉植物事典「万葉植物を読む」』 平成7年 山田卓三・中嶋信太郎著、他）

名くはしき 稲見の海の 沖つ波 千重に隠りぬ 大和島根は 柿本人麻呂（巻3-303）

（大意：名高いいなみの海の沖合の波、故郷大和の遠景ははるか波の彼方に隠れてしまった。）

印南野の 浅茅押しなべ さ寝る夜の 日長くしあれば 家し惚ばゆ 山部赤人（巻6-940）

（大意：いなみ野に広がる浅茅を押し伏せて寝る夜が何日も続くので、故郷の家のことがしきりに思われる。）

家にして 吾は恋ひむな 印南野の 浅茅が上に 照りし月夜を 作者不詳（巻7-1179）

（大意：家に帰って私は思い出すことでしょう。いなみ野に広がる浅茅に照りつけた月夜の風景を。）

後れるて 吾はや恋ひむ 稲見野の 秋萩見つつ 去なむ子ゆえに 阿倍大夫（巻9-1772）

（大意：後に残る私こそ恋しく思います。いなみ野の萩を眺めながら去りゆくあなた故に。）

明日よりは 将行の河の 出でてなば 留れる吾は 恋ひつつやあらむ 作者不詳（巻12-3198）

（大意：明日からいなむの河 [=加古川] の流れのようにあなたが出て行ってしまえば、残される私は恋しく思い続けるでしょう。）

伊奈美野の 赤ら柏は 時はあれど 君を吾が思ふ 時は実無し 安宿王（巻20-4301）

（大意：いなみ野の柏 [アカマガシワとも] の葉には赤くなる時期がありますが、陛下をお慕いする私には時期など全くありません。）

いなみ野万葉歌人略伝 (出典：『朝日日本史人物事典』、『新編日本史事典』)

柿本人麻呂・・・かきのもとのひとまる。生没年不詳。白鳳時代(645～710)の下級官吏というのが伝記不明。地方官として近江・讃岐・筑紫・石見へ赴任し、石見で没したらしい。万葉集の頂点をなす大歌人で、約450首以上が収録されている。歌会儀礼における天皇・皇子女への讃歌を形式的に完成した。また、自身の妻の死に際して詠んだ亡妻挽歌も傑作、平安期には歌聖と称された。

山部赤人・・・やまべのあかひと。生没年不詳。聖武天皇(天皇在位724～749)の頃の宮廷歌人。行幸供奉(ぎょうこうぐぶ)の作が多く、優美・清澄な自然を題材とする叙景歌に秀でる。「田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪はふりける」は特に有名。万葉集には50首が収録され、柿本人麻呂に並ぶ歌聖と称される。「印南野の浅茅押しなべ…」も、印南野行幸(726年10月7日～同19日)に随行した際に詠まれたもの。

阿倍広庭・・・あべのひろにわ。生没年659～732。公卿。大神高市麻呂(おおみわのたけちまる)が長門守に任ぜられて任地へ赴任する際、三輪川(奈良県桜井市)のほとりで開かれた送別の宴で「後れみて吾はや恋ひむ稲見野の…」を詠んでいる。高市麻呂と共に遠方へ行ってしまふ女性に対する恋歌と解するのが一般的であるが諸説ある。

安宿王・・・あすかべおう。生没年不詳。長屋王と藤原不比等の娘の間に生まれた皇族。「伊奈美野の赤ら柏は…」は754年正月の宴において、ときの考謙天皇(女帝)・聖武上皇らに対して詠まれている。しかし、聖武朝末期の745年以降、皇族の橘奈良麻呂(たちばなのならまる)が藤原氏打倒・安宿王らへの譲位を画策、同志を募り機会を窺っていた。決起直前の757年7月、密告により計画が露見、反藤原派四百数十名が逮捕され、橘奈良麻呂は獄死、安宿王は佐渡に流された。773年、安宿王の娘が皇后となったため許され、高階姓を下賜された。









